

神奈川文芸賞 [2022]

三崎港と書かれた発泡スチロールを開けると、潮の匂いがした。海と魚の、強い匂い。仕事と眠るだけの無機質な部屋に、生きてくるものの匂いが満ちていく。この匂いは、僕にいろんなことを思い出させる。

箱に両手を入れて、大量の保冷剤をかき分けて冷やした中身を手に取る。ワラサとアジと金目鯛。それぞれ一尾ずつ入っている。触れると、身がパンと張っていて今にも動き出しそうだった。いい魚だ。送り主は確かめなれてもわからない。

僕が町を出たあとも、かっちゃんも毎月のように魚を欠かさず送ってくれる。今まで一度だって途絶えたことがなかった。

テーブルに散らばった仕事の書類をぎゅっと横に流して、スマホを手にとった。かっちゃんの二歳になる娘の写真がアイコンになったトーク画面を開く。港町の朝は早い。起きてくるだろうか。『ごめんサマ、無事届いた』

冷たい指でゆっくりと打って手を離すと、すべてにスマホが鳴った。『まあまあまあだっ！』

『今日はまあまあだっ！』最高だ！『おっ、ちゃんと食えよ！』

『おっ、ちゃんと食えよ！』『おっ、ちゃんと食えよ！』

『おっ、ちゃんと食えよ！』『おっ、ちゃんと食えよ！』

『おっ、ちゃんと食えよ！』『おっ、ちゃんと食えよ！』

『おっ、ちゃんと食えよ！』『おっ、ちゃんと食えよ！』

『おっ、ちゃんと食えよ！』『おっ、ちゃんと食えよ！』

『おっ、ちゃんと食えよ！』『おっ、ちゃんと食えよ！』

『おっ、ちゃんと食えよ！』『おっ、ちゃんと食えよ！』

『おっ、ちゃんと食えよ！』『おっ、ちゃんと食えよ！』

『おっ、ちゃんと食えよ！』『おっ、ちゃんと食えよ！』

『おっ、ちゃんと食えよ！』『おっ、ちゃんと食えよ！』

『おっ、ちゃんと食えよ！』『おっ、ちゃんと食えよ！』

染のかっちゃんの家で過ごす。魚屋が忙しさと母はかっちゃんの家に来た。そうして僕は三兄弟のように育った。

魚の日は、とれた中でいい魚だけを父はバケツに入れて帰ってくる。ワラサ、ヒラメ、アジ、サバ。

『好きなやつを選ば』修とバケツに顔を突っ込んで鱗がきらきら光る魚を探して、それがいつも夕飯になった。

祖母が飽きないように煮たり焼いたり漬けにしたりして、余った朝ごはんになる。白飯の上にとんと魚が一尾、載っているのがうちの朝食だ。父は細身だったが、それでも腕や首、日に焼けた肌には働いてきた逞しさがあった。

港で縄の修理をしている父に修が「船に乗りたい」とせがむと、手を繋いで停まっていた船に乗せてくれた。停まっているのに、船はキキキ、と音をたててゆらゆらと揺れた。海に出たらどれほど揺れるのだろうか。

二度目は城ヶ島の周りを一周して見えた。陸から遠ざかって町を見ると、別の町のように見えた。半周するあたりで頭がぐるぐる回って、僕は甲板のポールにしがみついた。修は父の横でびよんびよん飛び跳ねて笑っている。信じられないと思いつながら、僕は身を乗り出して少し吐いた。

遠くに漁に出たときは、立ち寄った港町のお土産を買ってきてくれた。神戸に気仙沼、高知、銚子。乗ったことのない電車のおもちゃ、赤い鳴子、丸い太陽の描かれた扇。差し出された袋は、いつもパンパンだった。

母さんが好きだったからと言って、真珠を持って帰ってきたこともあった。父が手をひらいて、白く光る玉が一粒載っていた。

戻ってくるまで、修は父の足につかまっただけであったことを話した。修が廊下に牛乳をこぼしちゃったこと

と。海南神社のお祭りでも僕が神輿を担いだこと。祖母は父の足から修を剥がして、父にふかふかの布団を敷いた。

「来月からでかい船に乗るの？」父が世界の海で仕事をしようになったのは、僕が中学に上がってからだった。

「今度はどこまで行くの？」尋ねると、父は古い地球儀を持ってきた。節くれだった人差し指が差したのは、青い海が広がる、その真ん中あたりだった。

ケープタウン、ペルー、スペイン。お土産はどれも増えて、どれもが香ばしいような、嗅いだとこのない不思議な匂いをまとっていた。父は一つ一つを手に取りながら、その街のことを話した。どんな人たちがどんなものを食べて暮らしているのか。夜は何時に暗くなって、海はどんな色をしているのか。僕が質問すると、面倒くさがるように答えてくれた。わからないことはわからないと言った。父は好きだった。

父は船に本を持っていくようになった。漁の仕掛けが終わってエンジンが止まると、みんなシヤワーを浴びて眠ってしまう。父は眠る前の束の間、誰もいない船上でページをめくった。

読んで面白かった本は僕らに売られた。「トムソーヤの冒険」「飛ぶ教室」「銀河鉄道の夜」。父がいよいよ本を読んでもわからない言葉には印をつけた。帰ってきたら聞こうねと言いつつ。

船で赤道付近まで行くと、太陽の光が透ってぱんぱん降り注ぐ。夏の夜には南十字星やペルセウス座流星群が空で見える。見えるなんてレベルじゃない、雨みたいに降ってくるんだ。そう話すと父の目は輝いていた。

「みせてやりたいよ」静かな洋上に降る星を、僕は父を通して夢想した。

長い漁に出るときは、祖母や修、かっちゃんの家と花暮岸壁から父の乗る船を見送った。七海丸はその中でも一番大きな船で、出たら二年は帰ってこない。見送る家族や商店街の人もひとときわどかかった。人の波に埋もれないように、父に見つけてもらえるように、僕は岸壁のギリギリまで歩いた。

「いたー」先に父を見つけたのは修だった。背え立つ城のよつな船の甲板に父は立っていた。水面が朝日を浴びて点滅するように光って、島の向こうにうみうみが飛んでいる僕らが叫ぶと、気づいて手を振り返した。ボー、ボー、ボー。

汽笛が鳴ると、船の中の人たちがテーブルを岸壁に向かって一斉に投げた。空に色の線が舞う。赤、青、黄色、緑、オレンジ。五色のテーブルが続々と降ってくる。

父も握っていたテーブルをこちらに向かって投げた。黄色だ！修と言いつつ岸壁に落ちたテーブルを追いかける。絡まり合うテーブルをかきわけて、黄色の線を描いた。竹筒に差し込んで修に渡す。テーブルを直接持っている怪我をするから。そう言いつつ父は竹筒をくれた。

船がゆっくりと岸から離れていき、修の手にあるテーブルがカラカラと音を立てて回り始めた。「ねえ、ボーボーはなんの意味？」修が訊く。

「ごきごきのは長い音が三回だから、「見送りあり」とう。さようなら」だったかな」

「へー。じゃあ、どういったして？」

「うーん。それよりはいつだってさ、だろってさ」

「お父さんいらないね」

修が泣きそうな顔で僕を見上げた。

すぐ隣では、長い漁を終えた漁師たちを迎える準備をしている人が、せわしなく行き来している。父と同じようなカッパを着ている人を捕まえて、僕は尋ねた。足を止めてくれた人は、父は体調を崩して立ち寄った港で休んでから戻ると連絡があったことを教えてくれた。

「大丈夫。よくなったら戻ってやるよ」

体調を崩しては、どういっ状態なのか。怪我をしたのか。僕は重ねて訊いたが、詳しくはわからないんだ、と申し訳なさそうにうつむいた。どこかぜんぜんかかると悪いらぬ。治すって、とれくらいこの時間がかかるのだから。たった一人だ。

季節を二つ過ぎて父からは連絡はなかった。待ちくたびれた修は廊下に貼ってあったカレンダーを破って泣いて、本につけた印だけが溜まっていった。

「市田くんのお父さんは出張で一週間いなくなった。ミクちゃんのお父さんは一年。たんしんふにんでいごいごがあったって。だから修のころももうすんだよ」

小学校から帰ってきた修は、そう言うようになった。漁港のつながり父のことを聞いた子が、修を心配して言ったのだ。

隣の斎藤くんはとれた野菜を持ってきては、祖母だけになく僕たちに声をかけてくれた。

「お母さんいないんだから、さみしいだろうに。」

上がった。いつだってさ、だろってさ。いってらっしゃーい！いってらっしゃーい！

歌声を浴びながら、船は港を出ていく。テーブルが風に揺れ、たわむ。皆、さみしさも不安も期待もぜんぶ飲み込んで笑っているように見えた。

「船、行っちゃっ！」修が急に走り出した。ちいさな体は、岸壁に立つ人の足の隙間をぬってどんどん進む。

「おい、走らな修」岸壁を疾走する修を、僕がかっちゃんに追いつけた。すぐ横は海だ。人がぶつかって謝って、小さな背中を追った。

「走らな！落ちろぞ。止まれ、修！」追いついて腕をうしろから掴むと、修はバランスを崩して転び、そのすきで僕もつまづいてその場に倒れ込んだ。修の手にあるテーブルを離して、顔を上げてはっとした。そこは岸壁の終わり、すべて先は深い海だった。

「馬鹿。死ぬぞ」修はうつぶせのまま、うなっている。豆粒よりは少し大きい父は、僕らを見て笑っているようにみえた。

「五月には帰れそう」帰りを知らせる電話が鳴ると、僕たちはカレンダーに星印を付けて待った。おと七月。おと一週間。電話の通り、七海丸は一年を少し過ぎて帰ってきた。帰港の知らせを受けた僕たちは船から降りてくる人々を一人一人食い入るように目で追った。けれど父の姿はなかった。

「お父さんいらないね」

修が泣きそうな顔で僕を見上げた。

すぐ隣では、長い漁を終えた漁師たちを迎える準備をしている人が、せわしなく行き来している。父と同じようなカッパを着ている人を捕まえて、僕は尋ねた。足を止めてくれた人は、父は体調を崩して立ち寄った港で休んでから戻ると連絡があったことを教えてくれた。

「大丈夫。よくなったら戻ってやるよ」

体調を崩しては、どういっ状態なのか。怪我をしたのか。僕は重ねて訊いたが、詳しくはわからないんだ、と申し訳なさそうにうつむいた。どこかぜんぜんかかると悪いらぬ。治すって、とれくらいこの時間がかかるのだから。たった一人だ。

季節を二つ過ぎて父からは連絡はなかった。待ちくたびれた修は廊下に貼ってあったカレンダーを破って泣いて、本につけた印だけが溜まっていった。

「市田くんのお父さんは出張で一週間いなくなった。ミクちゃんのお父さんは一年。たんしんふにんでいごいごがあったって。だから修のころももうすんだよ」

小学校から帰ってきた修は、そう言うようになった。漁港のつながり父のことを聞いた子が、修を心配して言ったのだ。

隣の斎藤くんはとれた野菜を持ってきては、祖母だけになく僕たちに声をかけてくれた。

「お母さんいないんだから、さみしいだろうに。」

心配だね」ありがどう。大丈夫です。いただきます。玄関に立つ斎藤さんにそう言って、野菜を抱えて廊下に逃げた。背後から、これからどうするつもりなの、といつかさやく声が聞こえる。答えた祖母の言葉は聞き取れなかった。

みんな僕しかった。心配して声をかけてくれる。台所まで進ぶと、僕はその場に座り込んだ。大根も白菜もみずみずしくすっしりと重くて、もう、手がちぎれそうだった。

父が帰ってきますように。祈るように僕はいつも眠りに落ちた。

父から連絡があったのは、それから二ヶ月後、祖母がとった電話だった。祖母は少し話したあと、淡々と僕に受話器を差し出して言った。「電話だよ。父さんから」

父は僕の名前を呼んで、『元気だったか』と言った。二年ぶりの父の声だった。かすかな声色の揺れを逃さないように、耳がぶれるほど受話器を押し当てた。父の声は記憶の中の声よりも低く、弱く聞こえた。

「今さ。体、大丈夫なの」

「遅くなって悪かった」

「もう帰れるの？」

父は黙った。なぜ答えてくれないのだろう。僕らがどれだけ心配していたか。どんな思いで待っていたか。僕は拳を強く握って、沸騰しそうな感情を押し殺して父の言葉を守った。帰りがかった。会いたかった。今すぐ帰る。期待していた言葉を胸の内でも繰り返しながら。

「わかったら連絡する。修は、元気が」

修はもう寝てしまった、と伝えると、『そうか。起さなきゃいけない。風邪がへなと伝えてくれ』と言った。父の声のうしろでは、ヒョコヒョコ、という機械が動く音や罵声が飛び交っていた。その音が大きくなった。低く小さくなった。低く、低い父の声はかき消されてしまった。

「……それだけ？」

父は何も言わな。『それだけかよ』

『本当に悪かった。……実は』

『悪かった悪かったって、そんな簡単に、簡単に言うなよ！』

どんな言葉ならこの温度が伝わるんだろう。電話台を手で叩くと、カン、と何かが落ちた。白く丸い玉。真珠。母が好きだった真珠が、廊下へ転がっていった。

真珠は貝の中でとれるんだ。泥や虫が貝の中に入ると、その痛みを耐えながら貝はそれを包んで真珠に変える。白くて、光って、きれいだろ。そう教えてくれたのは父だ。

受話器を耳にあてながら、僕はかんで二粒を拾い上げた。『帰るかい。必ず』

絞り出すように父はついに言った。父の不在は、遠くに住む伯父にも届いた。

神奈川文芸賞

小説部門：大賞 真珠の子／河村 佳



イラスト／川又和希 (県立相模原弥栄高校美術部2年)

